若　者

チェコスロヴァキア独り旅

半　田　祐　一*

僕にとって“東欧”という言葉はどこか神秘的・魅惑的な響きを奏でてくれる．それは多分に社会制度の違いのため情報が下充分で，時折目や耳にする情報も偏っていることが多いせいかと思われる．我々に何らかの価値判断の余地を残しているのはスポーツ・芸術などの文化的領域のみである．僕がチェコスロヴァキアに行きたいと思ったのも確固たる目的があったわけではなく，むしろその名前にひかれたという感が強い．大作曲家ドヴォルザーク，スメタナ，体操のチャスラフスカといった諸々の概念が，いつのまにか僕自身の頭の中にチェコスロヴァキアという国を形成していた．

単に旅行するだけでは物足りないと思い，IAESTE という機関が斡旋する工業技術研修という形で長期滞在を希望したが，生憎チェコスロヴァキアの実習先は見つからなかった．東欧諸国はユーゴを除く全ての国で査証（ビザ）が必要で特別な場合を除き長期滞在はまず無理である．結局のところ観光客という形でしか東欧に入れなかったが，自分自身としては常に様々な人と積極的に，“absorptive”に接するという姿勢だけは大切にしてきたつもりである．

旅に出かけたのは昨年夏で，チェコ，ハンガリー，ルーマニア，ブルガリア，ユーゴなどの東欧諸国を1カ月，さらに西欧諸国を1カ月，夏休みをフルに利用した旅行であった．ここでは特に印象の強かったチェコでの僕自身の体験談・失敗談を書いてみたいと思う．

チェコの最初の訪問地は，国の西端に位置する古くからの温泉地カルロビ・バリである．ドイツ名ではカルル水，カルルスバードとしてよく知られている保養地である．入国はドイツから国際列車を利用する．入国手続は査証のチェック，両替，貴重品の登録など他の西欧諸国に比べるとずっと面倒なものである．失敗の第1段は下車駅を間違えたことである．夜行で入国したためねぼけていたのと，駅名が読めなかったのが重なり，1時間程手前の駅で下車してしまった．朝の5時頃，雨はシトシト降るしまわりは顔つきも言葉もまったく違う人ばかり，寒いやら心細いやらで生きた心地がしなかった．まだ5時だというのに駅には人が多い，これも国民性の1つであろう．次の列車でカルロビ・バリへ，車掌さんは体格のいい女性で，本などでよく目にかかる働く女性像を連想させる．

カルロビ・バリの駅から市街まではバスが運行していたようだが言葉の障壁を乗り越える気力がなかったので自分の足で歩くことにした．街をうろうろしていると何となく人々の視線が集まり，自分が比較的稀な外国人であることを意識する．第1の難関はまずガイドブックにある国民宿舎“Alice”を見つけることである．市街のバス停の付近にいる人をつかまえて住所を指で示してたずねる．最初の2人の人はただもうチェコ語が返ってくるばかりで，まったく要領を得ない．やっと3人目の人がドイツ語が話せるらしくほっと一息．ドイツ語がこれほど有難く思えたことはない．同時に自分のドイツ語がまったく絵に書いた餅ほどにも役のたたないものであることを実感した．親切に教えてくれたのはブロンドで灰色の瞳をもつ典形的なチェコ美人であった．典形的なという表現はいささか個人的で偏見にみちてはいるが…．

次は宿舎の受付，これまたチェコ美人，措しむらくは英語はだめ，ドイツ語も少ししか話せないことである．もう1人の女性が救援に来てくれる．彼女の方は英語が少し，ドイツ語は完全といったところ，またしてもほっと一息．こ

* 半田祐一（Yuichi HANDA），大阪大学工学部，電子工学科，小山研究室，博士課程前期2年，大阪大学大学院工学研究科，電子工学専攻

の国で英語の話せる人と出会うとしたらホテルのフロント係とヤミドル買い位のものである．

カルロビ・バリはチェコでは有数の観光地らしく近隣の国々から保養客が集まる．日本人は入国以来目にしない．ここの温泉はカルル水で有名な飲む温泉で街のあちこちに泉があり，それを独特の容器で口にするのである．手の平大の平たい水差しを各自が持ち歩き，味わいながら飲んでいる姿が印象深かった．本によれば温度40～70°C，泉質はアルカリ性塩類で胃腸病にいいそうである．僕も試しに水差しを買って少し飲んでみたところ石けん水をうすめたような舌ざわりで独特の味がしたのをよく覚えている．

カルロビ・バリに2日滞在した後，チェコの主都プラハへ向う．鉄道よりバスが便利ということなのでお昼すぎのバスに乗り込む．隣の席はクリスチーナ・セマノバさんという化学を勉強している女子大生，家は国の東部トレビソフという所にあり，カルロビ・バリへは親戚の家に遊びに来たという．これだけの事を知るのにかれこれ半時間程話しただろうか．彼女はロシア語，ポーランド語，ハンガリー語など近隣の国の言葉はほとんど話せるのだが，英語はまったくだめ，ドイツ語が少しといったところ．従ってお互いに会話といっても単語と単語をつなぎ合わせたようなぎこちないものであった．チェコに入国以来，第2外国語には泣かせられる．カメラを指さして写真をとらせて下さいと言ったらどういう行き違いか彼女は手帳の中から身分証明書用の写真を差し出してくれた．思わず苦笑せずにはいられなかった．プラハまで3時間のバスの旅はチェコ語を少し教えてもらったり，日本語を教えてあげたりであっという間に過ぎてしまった．バスを降りる前に“Schreiben Sie mir, bitte!”と言われた時には期待に胸ふくらむ思いであった．

プラハは東欧でも最も尖塔の多い街，それに街のいたるところに石畳があって中世のたたずまいをそのまま残している．モルダウの流れ，カレル橋，プラハ城これらの夕景は旅人の心をうつものがある．一方，市の中心街は近代的なホテルが立ち並び，地下鉄工事も進展中であった．物価は一般市民が利用する店・食堂などを利用すればことの他安い．その反面，外国旅行者向けのおみやげ屋，レストランは比較的高く，東欧といっても決して安心できない．宿舎は夏期休暇で空いている大学の寮を利用した．その夜飲んだ脂肪分がたっぷりの牛乳，生クリームたっぷりのケーキの味が今も忘れられない．

プラハの2日目はチェドックという旅行社の携供するプラハ郊外のカールシュタイン城とコノピステ城を巡るツアーを楽しんだ．両城とも楽隊が中世のコスチュームそのままで演奏を聞かせてくれたが，いささか“やらせ”の感が強いようにも感ぜられた．ツアーも終わり土曜の夕暮れの街をぶらつく．店々は全て閉まっているがショーウィンドウだけは照明されておりそれを見て歩く人も意外に多い．時々英語で話しかけてくるのはヤミドル買い，聞くところによれば公定の2～3倍のレートはざらだそうだが相手にしない．この国では滞在1日につき10ドルの換金義務があり特にぜいたくをしなければこれ以上は必要なく，ともすれば使いきれずにおみやげを沢山買うはめになるからである．

チェコ最後の訪問地は，ドナウ川ほとりのブラチスラバである．ヨーロッパの内陸都市で特長的なのはそれらがことごとく大河のほとりに息づいていることである．

今回の旅で実感した事は，学生の特権を多いに利用したケチケチ旅行をしようと思えば，英語のみならずさらにもう1つ外国語を自由に使いこなせるようにしておくのが望ましいという事である．これは他の東欧諸国についても言える事である．それから次に観光客用のレストランは敬遠し街の人で混雑している一般食堂を利用する事である．安いのみならず，その雰囲気も抜群である．ただしメニューはまず解らないから，他の人のまねをするしかない．

僕にとって旅とは“未知なるものへの積極的な出合い”，これに尽きる．現代はあまりに情報が豊富で親切すぎる．そんな時こそ自分自身の目，耳，肌で感じとったものを一層大切にしたい気持になるのである．